

めざす児童生徒像

つよく やさしく かしい子

- つよさ 真の強さをもった子に
- やさしさ すべての人にやさしい子に
- かしい子 みんなでとことん考える子に

※児童生徒結果-教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策		
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)						
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者				
(学校重点項目)	生徒指導	①②の項目について、肯定的回答をしている教員の割合が平均90%以上 ③④の項目について、肯定的回答をしている児童の割合が平均80%以上	① 生徒指導の4つの視点を生かした授業づくり、関心・安全な居場所づくりに努めている。	100			100			・①②の項目においては100%と目標指標を達成し校内研修で学んだことや、教師間での会話などあたたかい学校に向けて取り組んでいることがわかる。 ・③④の項目においても目標指標を達成し、児童会と連携した取り組み、教師の意識もあがったのではないかと。	・目標指標はどちらも達成できたが、何も取らずに経過すると結果は出ないと思うため、教師同士、児童会と連携も続けていく必要がある。		
			② 児童の自己有用感を高め、共感的人間関係を育むように努めている。	100			100						
			③ 児童が「自分にはよいところ、成長したところがある」と実感している。	86.7	93.5	95.6	6.8	100	95.9			97.2	-4.1
			④ 相手の気持ちを考えた言動をしている。	66.7	92.4	86.2	25.7	75.1	87.8			88.4	12.7
			集計										
重点項目	業務改善意識の向上	①②の項目について、肯定的回答をしている教員の割合が平均90%以上	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	93.3			93.3			①②③すべての項目において90%以上の肯定的な回答であった。 ②については、学校組織の中での役割が明確であっても、創意工夫ができたかについては個人裁量の部分があるので、難しいこともあったのではないかと考えられる。	学年や低・中・高学年部会、校務分掌等の様々なグループで協働しながら校務を進めていけるようにする。		
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100			93.8						
			③ 教職員が協働的に働き、仕事に「やりがい」を感じている。	100			100						
			集計										
			集計										

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策		
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)						
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者				
小松市共通重点項目	学校研究	①②の平均が中間・・・85%以上 年度末・・・90%以上	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100			93.3			数値・実態ともに高水準で定着している。一方、①「授業スタイル共有と共通実践」は年度末でわずかに低下した。	組織づくり・共通実践の運用密度・検証の仕方を検討・協議し、次年度に引き継ぐ。		
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語り、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100			100						
			集計										
			集計										
			集計										
	指導力の向上	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②④⑤の割合が、中間・・・80% 年度末・・・85%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	92.9	88.5		-4.4	93.8	87.3	-6.5	肯定的評価(1学期末→2学期末) ①教員92.9→93.8% 児童88.5→87.3% ②教員84.6→80.0% 児童91.3→87.8% ③教員83.3→80.0% 児童85.6→85.0% ④教員91.7→88.6% 児童93.3→87.3% ⑤教員100→100% 児童88.9→91.9% ⑥教員84.6→93.3% 児童94.7→94.6% 目標指数は①③④⑤⑥において達成した。しかし、②③④の項目において肯定的評価が下がっている。 ②対話活動の目的の言語化・時間配分・アウトプットの型がクラス間でばらつきが見られる。授業者が「深まった」の手応えを掴みにくいことも肯定的評価が下がった要因かもしれない。 ③④児童と評価観点の共有と実践頻度の不足。また、教員の期待値が高く児童の到達とズレが生じている。	②③④対話の型を児童に提示する。特に国語科の協働的な学びを教師側が意図的に活動させる場合は、対話の型を提示する。また、提示したものを活用できている児童を認め、児童全体に広がるよう努める。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	84.6	91.3		6.7	80	87.8	7.8		
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	83.3	85.6		2.3	80	85	5		
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	91.7	93.3		1.6	88.6	87.3	-1.3		
				⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100	88.9		-11.1	100	91.9	-8.1		
学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③の平均が90%以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100			100			①②③の平均が97.2%となり目標を達成することができた。年度始めに、全教職員で学力向上に向けた共通実践内容の選定し、取組の目的や取り組み方の共通理解を丁寧に行ったことで、職員が足並みを揃えて日々の指導にあたることができ、目標指標達成につながったと思われる。学力調査の結果、学期末の評価テストの結果から、実践内容の効果を検証し、新学期に入る前に共通実践内容の修正、効果的な取組の選定などを行ったことで、職員の意識の高さを持続できた。	学力向上に関する取組は中学校区5校で情報を共有しながら行っており、年度初めにも職員にその旨を共有していた。しかし、特別支援学級の日々の実践の中では、中学校区での課題を共有しているという感覚を味わいにくかったようである。特別支援学級においても、学力向上の視点からの課題を共有できるようにしていきたい。		
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	100			93.8						
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100			100						
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	92.9			87.5						
			集計										
学習方法	①②の平均が中間・・・80%以上 年度末・・・85%以上	① 児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っている。 ② 児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を活用している。	100	84.9		-15.1	86.7	88.6	1.9	・①②の平均が職員93.4%、児童89.1%となり、目標指標を達成することができた。特別支援学級の児童の指導においては、学習方法や学習形態を自己決定させて取り組む活動を実践することが難しかった。 ・学習用端末の活用は日を追うごとに実践が進化している。	学習用端末の効果的な活用方法について、校内研修を継続していく。		
			100	89.9		-10.1	100	89.5	-10.5				
			集計										